UNIVERSITY OF CAMBRIDGE

AET1 and AET2
Asian and Middle Eastern Studies Tripos, Part IB and Part II

Tuesday 4 June 9.00 – 12.00

**Paper J5**

**Modern Japanese texts 2**

*Answer **all** sections.*

*Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** answer booklet.*

**STATIONERY REQUIREMENTS**
*20 page answer booklet*
*Rough Work Pad*

**SPECIAL REQUIREMENTS TO BE SUPPLIED FOR THIS EXAMINATION**
*None*

**You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed to do so.**

## Section A

(1) Translate the following passage from an **unseen** text into **English**. [**35 marks**]

# 可能性

それは、年に一度の儀式のようなものだ。時計の前で正座をし、文字どおり刻一刻と日付が変わる瞬間を、有貴（ゆき）は待ちかまえる。短針と長針が「12」の数字の上で一本の線となる。それを見届けて、あたらしい時間の中に自分が移り住んだことを実感する。自分がうまれたとされる日付が存在しない年ほど、三月一日を迎える直前にこの過ごし方をすることは有貴にとって重要だった。

有貴の誕生日は四年に一度しか来ない。

Question 1 continues…

人生で五回めの誕生日を迎える数か月前、有貴はその一文と出会った。

――私たちは言葉にできるより多くのことを知ることができる。

有貴の心はざわめいた。

――あの文章の意味を、もっと詳しく教えてください。

週に一度、非常勤講師をつとめる大学の教室にいる大勢の学生のひとりである有貴を、Sが知る由もなかった。それでもかれは、講師控室の入り口で突然声をかけてきた有貴の前で立ちどまり、声をかけたきり、次の一言がみつからないかのじょに見つめられるがままになる。Sは、もう数年越しで、公共空間における流動的要素――光、風、音など――の役割を考察する博士論文を執筆中という身だった。有貴の通う大学では、建築や都市は物理的な形態であると同時に現象する空間でもある、などと講じていた。あの文章を見たときにわたしは……と有貴は続ける。Sは、講義のために自分が板書した一文をすぐには思いだせなかったものの、有貴から目を離そうとはしなかった。自分がうまれたとされる日付は、省略される運命にある。

(TURN OVER)

Question 1 continues…

どこにいったんだろう？　三回めの誕生日があった小学六年生のときからずっと考えてきたことだ。Sが提示した一文の中にその答えがありそうだと有貴は予感した。言葉にされないけれど、あるはずのもの。渦巻く思いをなだめながら、

——わたし、こう見えて、まだ四歳なんです。

どうして、ほぼ初対面のSにいきなりそう打ち明けてしまったのか自分でも説明がつかない。けれどもそれがきっかけで、Sの顔がほころんだのは確かだった。

ON YŪJŪ: ‘Kanōsei’, in *Kūkō jikō* (2018), pp. 61-63.

Vocabulary (question 1)

| | |
|---|---|
| 儀式 | ceremony |
| 正座する | to sit in *seiza* |
| 刻一刻 | hour by hour |
| 待ちかまえる | to lie in wait |
| 見届ける | to make sure of |
| ざわめく | to be noisy, aflutter |
| 非常勤講師 | part-time lecturer |
| 知る由もない | to have no way of knowing |
| 控室 | staff room |
| 流動的 | fluid |
| ～た＋きり | having just done ～ |
| 身 | status |
| 博士 | PhD |
| 執筆する | 書く |
| 形態 | 形 |
| 板書き | to write on a blackboard |
| 省略する | to omit |
| 運命 | fate |
| 渦巻く | to whirl |
| なだめる | to calm, to soothe, to quiet (down) |
| ほころぶ | 大きく笑う |

(TURN OVER)

## Section B

(2) Read the **unseen** text carefully and answer the following questions in **English** in as much detail as you can (take content from the text only): **[35 marks]**

### 夫婦の会話時間ゼロ分

寝室といえば睡眠の専用空間という考え方が一般的でしょう。けれど寝室は眠るためだけの部屋なのでしょうか？

『寝室の文化史』によれば、フランス人がベッドで寝る以外に行うこととして、セックスが六三パーセント、読書が五三パーセント、音楽鑑賞が三一パーセント、朝食が二四パーセントなどとなっています。

フランス人は寝室が個室であって、そこは個人的な興味を満たす場所でもあるという意識が強いのではないかとおもいます。寝るだけでなく「居る」ための部屋でもある。つまり居室性をもとめているのです。

日本ではどうでしょうか。夫婦の寝室でこれだけ多様なことが行われているとはおもえません。日本人はよくテレビを見る国民ですが、夫婦の寝

Question 2 continues…

室にテレビがある家は少ない。この事実一つをとっても寝室を自分の興味を満たす場所として見ている人は少ないことがわかります。

息抜きはリビングルームで、寝室では眠るだけ、というのが一番多いパターンではないでしょうか。けれど子供が育ち盛りという家庭のリビングルームで読書や音楽鑑賞はむずかしいでしょう。せいぜいテレビと新聞で終わってしまうのではないか。だとすると、私たちはそうした個人的に娯楽を楽しむ空間を住宅内にもっていないということにもなります。

ここで主寝室の使用者である夫婦、そして結婚について少し考えてみましょう。

夫婦がひとつの部屋で寝起きするという同室就寝は世界的に一般的な就寝形態です。欧米では例外なくそうです。もし別々の部屋で寝ているとすると、当事者はそれを隠そうとするでしょう。夫婦という人間関係に失敗しているととられるからです。アメリカならそのまえに離婚しているでしょう。

アメリカの離婚率は四（人口一〇〇〇にたいする数）以上です。日本は近年増加していますが、それでも二程度だからかなり低い。フランスなどのカソリック圏の国では離婚は宗教上制約が多く日本とおなじくらい少ないのですが、最近はむしろ結婚しないカップルが急増していて、若い世代

(TURN OVER)

Question 2 continues…

では結婚そのものがオールドファッションとして否定されています。そうした「事実婚」の増加にフランス政府も結婚したカップルとおなじような優遇措置をとるようになりました。

こういう事実をみると、日本の夫婦は安定してみえます。けれど離婚が少ないからそれだけ夫婦仲がいいのかというと、どうもそうではないようです。

シチズン時計が行った「夫婦の対話時間」の調査によると、二五年まえと比較して一日三〇分という答えが約三五パーセントから約二〇パーセントにへり、逆に一五分が約二〇パーセントから約三〇パーセントへと増加しています。なかでも注目されるのは、二五年まえは対話時間がまったくないという答えはなかったのですが、いまは約一〇パーセントもいるという事実です。一〇組に一組はまったく会話がない夫婦なのです。単身赴任がふえたのでしょうか。それは二五年まえもありましたし、当時とくらべて通信手段も発達していることを考えると、夫婦の会話が圧倒的にへっていると考えるのが順当でしょう。

会話ゼロという状況はコミュニケーション不足というような生半可な事態ではありません。あえて口をきかないという意識が働かなければこうはなりません。しかしそのような「冷めた」関係を一つの寝室でつづけていくのはひどく骨の折れることでしょう。

FUJIWARA TOMOMI: *Sumai kara kazoku o miru. NHK Ningen kōza* (2002), pp. 100-103.

Vocabulary (question 2)

| | |
|---|---|
| 音楽鑑賞 | enjoying/listening to music |
| 〜性 | characteristic |
| 満たす | fulfil |
| 育ち盛り | growing up |
| せいぜい | as far as possible |
| 娯楽 | enjoyment |
| 就寝形態 | sleep arrangement |
| 当事者 | the person concerned |
| 圏 | circle, area (in the sense of a region that shares common cultural traits) |
| 制約 | restriction |
| 事実婚 | common law marriage |
| 優遇措置 | preferential treatment |
| シチズン | Citizen (company name) |
| 組 | couple |
| 通信 | (electronic) communication |
| 順当 | proper, regular, normal, reasonable |
| 生半可 | superficial, half-hearted |
| 骨の折れること | something very difficult (back breaking) |

(TURN OVER)

Comprehension questions (question 2)

1) Explain in detail how bedrooms are used in France and in Japan. **[7 marks of 35]**

2) What are the things for which people use their living room in Japan? **[5 marks of 35]**

3) What are the most common sleeping arrangements for married couples worldwide? How does the author interpret a situation where this is *not* the case? What does the author assume Americans would rather do than *not* following such sleeping arrangements? **[8 marks of 35]**

4) What are the divorce rates in America, France and Japan? What phenomena can be observed in Western countries where divorce rates are low? **[7 marks of 35]**

5) How much do Japanese couples talk to each other, how has this changed and what is the background to this change? **[8 marks of 35]**

## Section C

Translate **ONE** of the following passages from seen texts **into English [30 marks]**

(3)

†多言語社会は確かに「むずかしい」。[2]ドイツも公用語は一つだが、現実的には多言語社会である。たとえば、移民の子が言葉が充分にできないために学校の授業についていかれないということが問題になっている。そんな問題は二世代目になれば自然に解決するだろうと思って真剣に対策*を練らずにいたら、そうではなかった、ということがよく新聞に書いてある。ドイツで生まれ育った二世代目は日常会話はできても高等教育に進むのに必要な学力のない子供の割合が大変多いことが最近の調査で分かった。しかし、それを移民そのものの問題にすり替えて、だから外国人を入れない方が良いという保守派の意見も間違っている。なぜなら、たとえばスウェーデン[9]などの移民二世の学力は高いという統計も出ている。つまりこれは移民の問題ではなく、その国の教育の問題なのだということになる。日本では、クラスの生徒の三分の一以上の子が日本語が分からないという状態を体験した小学校教師はほとんどいないのではないかと思う。そういう状況で授業を進めていくには、これまでの教師養成プログラムだけでは間に合わない。

TAWADA YŌKO (2003): '*Exofonii*', *Kokugo sōgō: Gendaibunhen* (2012), pp. 138-39.

(TURN OVER)

(4)

最初はとにかく驚いた。次にあきれて、教師をやっているのがむなしくなってきた。
しかし、落ちついてくるに従って、だんだんと、これが現実の姿であるかもしれないなと思うようになった。ひょっとしたらこれは国際化をめざして進む現在の日本の姿そのものかもしれない、という気がしてきたのだ。
簡単に説明すると……。
私立銘宝学園高校で、二年生の英語を教えている教師駒沢和夫は、夏休みにちょっと骨のある宿題を出したのだ。
何でもいいから、英語の本をひとつ、翻訳してこい、という宿題だ。
大長編は無理だろうから、短編小説をひとつ訳してみればいい。もしくは、長編ならその冒頭の一章だけ、ということでもいい。小説に限らず、ノンフィクションでも構わない。とにかく、原稿用紙にして、二、三十枚分の翻訳をしてくるように、という課題であった。
銘宝学園高校は、正直言ってそうレベルの高い学校ではなかった。卒業後、大学へ進学する率が五十パーセントくらいで、それも、そんな大学あったっけ、というような無名大学へ進む者がほとんどだった。
しかし、学力的には世の中の平均より落ちるかもしれないが、銘宝学園は荒廃した暴力高校などではなかった。それが校風なのだろうが、生徒たちは案外素直で、純朴なところがあり、駒沢はそういう教え子たちをこれはこれで可愛(かわい)い奴(やつ)らだと思っていた。

SHIMIZU YOSHINORI: ‘Snow Country’, in *Ese monogatari* (1991), pp. 90-91.

**END OF PAPER**